

---

「ご一緒にポテトはいかがですか」殺人事件

堀内公太郎



幻冬舎文庫



「一緒にポテトはいかがですか」殺人事件



## プロローグ

——あいつがどうして死んだか知りたくないか。

怖いと思う気持ちもあったが、その言葉に導かれるようにここまでやってきた。正直、今は来てよかったと思っている。

古いビルの一室だった。すべての窓にブラインドが下ろしてある。外の様子はうかがうことができなかった。連れてこられた車の中でも目隠しをされていたので、ここがどこなのか見当もつかない。

「本当に第五世代の奴らは昔からタチが悪くてね」目の前に立つ坊主頭の男が肩をすくめた。

「《ニューエイジ》と自ら名乗っては、我々の言うことを聞こうとせず困っていたんだ」

坊主頭の後ろにはもう一人、目つきの悪い男が仁王立ちをしていた。無表情にこちらを見つめている。まるで格闘家のように身体の大きな男だった。一時間前、道端でこの男に声をかけられてここまで連れてこられていた。

空気がよどんでいる——。

以前は会社のオフィスだったらしく、いくつかの机や椅子が端に寄せて置いてあった。しばらく使っていないのか、すべてにうっすらと埃がかかっている。

「ああいう奴らこそ社会のガンなんだ」坊主頭が続けた。「確かに、君から見れば、我々もロクでもないように見えるだろう。しかし、我々は必要悪だ。社会から弾き出された若者の受け皿になっている」

坊主頭は高級そうなスーツに身を包んでいた。一見するとやり手のビジネスマンにも見えたが、全身からかもし出す雰囲気はあきらかに一般の人とは違っていた。

「あいつも我々が受け入れた一人だよ。受験に失敗して自暴自棄になっていたところに、我々が救いの手を差し伸べたんだ。表の世界では、たった一度の失敗で人生が終わってしまう。我々はそういう若者に生きる希望を与えている。社会にとって必要なんだよ」

男がやれやれと首を振った。

「それに比べて、奴らはどうだ。堅気のような顔をして、表の社会に溶け込んでいる。本質的には、昔とにも変わらないのに。奴らは寄生虫なんだよ。だから、我々は今回の行動を起こそうとした。正義感などと言うつもりはないが、奴らのやっていることがどうしても許せなかったんだ」

ずっとなぜ死んだのか理由が分からなかった。しかし、坊主頭の話聞いたおかげですべ

てが理解できた。

「あいつは本当に素直でよく働く奴だった。私はあいつを買っていた。将来の幹部候補として考えてたぐらいだ。だから、今回のミッションも任せたんだ。あいつなら信用できると思つてね。それがこんなことになるとは……」坊主頭がため息をついた。「奴らは五人全員でよつてたかつてあいつを貶めたんだ。あれはもはや殺人だよ」

胸の内に、どす黒い感情が渦巻いていた。人の命を虫けらのように扱つた奴らに感じるのは、憎悪以外のなものでもない。

「君も悔しいだろう」坊主頭が同情するような表情を見せた。「君の気持ちはよく分かる。我々も同じ気持ちだ。悔しくて、悲しくて、なによりも腹立たしく思っている」

表からクラクションの音が聞こえた。ブラインドのすき間から差し込む光が、室内に舞う埃を照らし出している。

「我々はこのままおとなしくしているつもりはない。あいつの仇かたきを取るつもりだ。そのためにはあいつのあとを継いで、今回のミッションをやり遂げる人物が必要だ。そこで君にぜひ協力してほしいと思つている」

坊主頭を見つめた。

「君にはあいつの代わりにハピハピを盗み出してほしい」

坊主頭がどういう人物なのか、詳しくは知らなかった。話を聞いているかぎり、マトモな仕事をしている人間でないのは確かだろう。しかし、そんなことはどうでもよかった。仇が取れるのであれば、悪魔と契約をしたっていいと思つてゐる。

「並行して、奴らには落とし前をつけてもらうつもりだ。目には目を、齒には齒をと言うだろう。だったら、命には命で償ってもらわなとな。君が自らの手でやりたいというのであれば、協力してもいい。あいつも君に仇を討ってもらえれば本望だろう」

きつとそうだと思つう。そうであつてほしいと願つた。

「手伝つてくれるかな」

あの日以来、凍りついていた心に感情が戻つてくる。抑えきれないほど激しい怒りの感情だった。この感情を鎮める方法は、きつと一つしかない。

小さく息を吐いた。ゆつくりと顎を引く。

坊主頭が口元をゆるめた。近づいてきて右手を差し出す。

その手を握り返した。

「よろしく頼む」坊主頭が口角を上げて笑う。

きつと本物の悪魔もこういう笑い方をするに違いないと思つた。



\*\*\*

【史上最悪】東京ピエロ今昔物語【史上最強】 58

1…名もなき外道

【東京ピエロについて】

200X年、東京都足立区・江戸川区に住む当時十七歳の少年七人が東浜三蔵をリーダーとして結成した暴走族グループ。最盛期には三十名前後が所属していた。

結成から七年後、第五世代（\*）の引退によってメンバーが不在となり、事実上の解散となった。十年経った現在もその状態が続いている。

結成当初から凶暴性が際立っていて、数々の暴力事件（死亡事件を含む）を起こしていた。有名などころでは、オリンピック代表の柔道家Kに対する集団暴行事件、ヒップホップアーティストSの傷害致死事件などがある。警視庁組織犯罪対策課の刑事が誘拐されたとの噂もあるが、真偽は不明。

（\*）二十歳での引退が慣例となっていた東京ピエロには、第一世代（G1）から第五

世代（G5）がある。生まれ年で分かれていて、世代ごとにリーダーがいた。基本的に上世代の命令は絶対だが例外の世代もある。

## 2..名もなき外道

### 1の続き

#### 【カンパニーについて】

東京ピエロのOBは、振り込め詐欺、訪問販売詐欺、闇金融といった様々な裏ビジネスを展開している。それらの犯罪グループを総称して「カンパニー」と呼ぶ。

ただし、OB自らが直接犯罪に関わることは少なく、街でスカウトした十代後半から二十代の若者が実行犯として活動している。中には元一流企業の会社員や有名大学の学生もいるが、自分がカンパニーの一員になっていることを知らない者も多い。

そのため、実行犯を逮捕しても主犯格であるピエロOBまではたどり着けず、カンパニーの実態解明にはつながっていない。

#### 【第五世代（G5）について】

第五世代（G5）は自らを《ニューエイジ》と名乗り、第一世代から第四世代とは一線

を画している。

上世代が暴力を前面に押し出していたのに対し、G5は街の顔役や不動産会社社長、芸能プロダクション社長といった表の世界で活躍するVIPの用心棒や汚れ仕事を引き受けていた。それを「媚びてる」とする上世代との対立が、内部抗争に発展しかかったこともある。これが東京ピエロ解散の一因とも言われている。

### 3 .. 名もなき外道

#### 2 の続き

【過去スレ】

【史上最悪】東京ピエロ今昔物語 【史上最強】 57

<http://xxxxxxxx/xxxxxxxx/xxxxxxxx/xxxxxxxx/>

### 4 .. 名もなき外道

テンプレは以上。

### 11 5 .. 名もなき外道

◇ 1 スレ立て乙。

6 ..名もなき外道

前スレ見てると、第五をもてはやしてる奴らがいたけど分かってないね。  
あいつらは体張る度胸もねえクソなのに。

先輩たちの七光で金持つてる奴らにすり寄ってたチキン野郎。

7 ..名もなき外道

◇ 6 化石がほえてるWW

あんた、G何？

8 ..名もなき外道

◇ 7 俺は単なる関係者。

でも東浜くんのごときはよく知ってる。

9 ..名もなき外道

三白眼の巨漢ハゲ坊主。

10…名もなき外道

◇9 それ東浜くんのこと？

マジでぶっ殺されんよ。

11…名もなき外道

◇10 おめえこそさつきからHくんの名前、気軽に出してんじゃねえよ。  
本気で追い込みかけてやろうか。

## 第一章

## 1

「ポテトのM二つとコーラのM二つ」カウンターの向こうで、二人の女子高生がメニューを見ずにそう告げる。

「以上でよろしいですか」

「いいです」

「少々お待ちください」

真行寺しんぎょうじあかりは笑顔で頭を下げると奥へ向かおうとした。一步目で膝が抜けたような感覚に襲われ、背筋がひんやりする。少し立ち止まっていると、すぐに違和感は去っていった。

ホッと息をつく。

「どうかした」声をかけてきたのは、マネージャーの神鳥かんどりさ早紀さきだった。あかりがいつも怒ら  
れている二十代半ばの女性社員だ。

「なんでもないです」あかりはあわてて告げた。

「だったら、早くして。お客さまをお待たせしないの」

「すみません」

あかりは急いでフライヤーへ向かった。ちょうど揚げたてのポテトが油の海から自動で上がってくる。見ただけで胸焼けがした。

この九月から、生まれて初めてのアルバイトを始めた。最寄り駅近くにある『やみつきドームス』というファストフード店だ。業界にはめずらしくチェーン展開をしていない地元密着型の店で、「一度食べたらやみつきに」というのがキャッチフレーズだった。

フライヤーの前にはあかりしかいなかった。手順に今ひとつ自信がなかったが、味つけはあかりがやるしかなさそうだ。

ポテトを網の上にあけると、スコップで広げていく。

この光景がいまだに苦手だった。油で光るポテトを見つめていると、気分が悪くなってくる。軽く顔を背けながら作業を続けた。

なんとか広げ終わると、ひと息つく。ここまですいぶんと時間がかかってしまった。急がないと、また早紀に怒られてしまう。

塩のボトルを手を取った。振りかけようとした瞬間、はたと考え込んでしまう。

ソルトが先だっけ？ それともパウダーだっけ？――。

ポテトを前にして、しばらく固まってしまった。気持ちだけが焦ってくる。まずい。このままだと絶対に怒られる。

「どいて」

振り向くと、先ほどまであかりの隣で接客していた七五三緑子（ななごころこ）が立っていた。黒縁メガネの奥から、冷めた目でこちらを見つめている。あかりと同じ二十歳で、同じく今月から働き始めていた。しかし、仕事の覚えはあかりの何倍もいい。

「順番が違う」緑子が小声で告げた。やみつきパウダーのボトルを手に取る。「最初にパウダーを横に二回、縦に二回」

緑子がポテトに隠し味の《やみつきパウダー》を振りかけた。あかりがやるというもムラが出るが、緑子がやるとまんべんなく行きわたる。

「今度はそっち」緑子が手を突き出した。

「え？」

「その持つてるやつ」

あかりはあわてて塩のボトルを手渡した。

「塩をハの字に一回」

緑子の手がカタカナの《ハ》の字を宙に描いた。ボトルから出た白い粒がポテトに振りか



かる。次にスコップを手にとると、手際よく全体を何度かかき混ぜた。

「できあがりだ」

「お見事」あかりは思わず拍手する。

「お見事じゃないだろ」緑子があきれた顔を見せた。「こっちは私が一緒にやるから、さつさとドリリンクを用意しろ。またマネージャーに怒られるぞ」

振り向くと、早紀が不機嫌そうにあかりを眺めていた。

「分かった！」

あかりはドリリンクの入ったコンテナの前へ急いだ。カップに氷を入れる。コーラは注ぐだけなので、さすがに迷うことはなかった。

「お待たせしました」

やっこのことでポテトとコーラをトレイに載せて、女子高生たちに手渡した。笑顔も忘れずにしっかりと向ける。

会計が済んだところで、「あのう」と女子高生の一人が話しかけてきた。

「はい。なんででしょう」

「店員さん、ここのポテトを食べてるから、そんなにスタイルいいんですか」

「は？」

「このポテトは食べても太らないって聞いたんですよ。そうなんですよ」

「えっと——」あかりは困ってしまった。実は食べたことがないとはさすがに言えない。

「残念ですが、太らないことはありません」助け舟を出してくれたのは早紀だった。「たくさん食べれば、当然、太ると思います」

「そうなんですかあ」女子高生が不満げに言う。よく見ると、二人とも少しぼちやりした体型だ。

「でも、ほかのポテトより太りにくい可能性はあるかもしれません」早紀が続ける。「やみつきポテトは当店の看板商品です。素材や油を厳選して、なるべく身体にいい材料を使っていますから」

「やっぱり」質問してきた女子高生の顔が明るくなった。「そうじゃないかと思ってたんだよね」

二人が席に着いたのを確認すると、早紀が隣に寄ってくる。「ああいうのはもう少し上手に対応してね」

「すいません。でも、さっきのホントですか」

「なにが？」

「うちのポテトは太りにくいって」

《やみつぎポテト》は、ドームスの看板メニューだ。来店客のほとんどが購入する。特に、地元の中高生には人気だった。

「どうかしらね」早紀が肩をすくめる。「でも、ウソはついてないでしょ。太りにくい可能性はあるかもしれないだから」

「なるほど」あかりは笑った。

店内に新しく客が入ってくる。あかりのレジへと向かってきた。

「しっかりね」早紀が耳元でささやくと離れていく。

あかりは頷くと、「いらっしやいませ、ドームスへようこそ」と客に笑いかけた。

## 2

「真行寺さん、そろそろ休憩だよ」店長の札山聡一郎ふだやまごういちろうが声をかけてくる。「俺も行くから」

「はい」あかりは返事をした。隣のレジにいる緑子を見る。「七五三さん、先に休憩行くね」緑子は前を向いたまま無表情に頷いた。愛想のかけらもない。

札山のあとについて店の奥へと入っていった。右手に長い廊下があって、左側に休憩室、事務所、更衣室の順番で並んでいる。廊下の突き当たりが従業員通用口になっていた。

休憩室には誰もいなかった。ちょうどシフトが入れ替わる時間帯なので、休憩からそのまま上がるバイトが多いせいだろう。

あかりが椅子に座っていると、「どうぞ」と札山が自動販売機で買ったミネラルウォーターを渡してくれた。

「すいません」あかりはあわててお礼を言う。「あとでお支払いします」

「いいよ、それぐらい」札山が笑った。自分は缶コーヒーを開けながら、「少しは慣れた？」と訊いてくる。

札山は三十歳だが実際はもう少し若く見えた。笑うと細くなる目が優しい印象を与える。

「全然ダメです」あかりは肩をすくめた。「さつきもポテトの作り方が飛んでしまって、七五三さんに助けてもらいました」

「まだ一週間だからね。気にする必要はないさ」

「でも、七五三さんは完璧です」

「彼女は仕事の覚えが早いね。まだ一週間とは思えないぐらいだ。めずらしくあの神鳥さんがホメてたからね」

「やっぱりそうですね」あかりはため息をついた。「同じ時期に入ったのに、ちょっとへこみます」